

PMR 資格試験への挑戦

Thai Nippon Steel & Sumikin Engineering & Construction Corp., LTD. (TNS)

PMO Sr. Manager

やまだ ともひろ
山田 知裕



1. 受験の動機

プロジェクトの失敗を複数経験し、どうしたらうまくいくか？教科書的なものは無いか？の観点から、たどり着いたのが PMBOK。プロジェクトマネジメントの方法論を知識エリアとプロセス群のマトリックスでまとめられています。その知識習得の過程で、プロジェクトの上位概念として「プログラム」なるもの、そのテキストである P2M に遭遇しました。決まった枠組みの中で実行されるプロジェクトだけでなく、自ら未来を創造し、未知の世界に切り込む「プログラム観点」こそ必要ではないか、と他問・自問が重なり、2017 年度に PMS～PMR までは同時に挑戦しました。

2. 受験の感想

PMAJ の HP には「PMR 資格試験は、P2M の実践力を認定する試験」と書かれています。一次試験での論述及び面接、二次試験でのモジュール試験と最終面接は、まさに「実践力」を問うものでした。

論述試験では全くの門外漢の課題に対するアプローチを問うものもあり、いままで業務で得た知識・経験をうまく当てはめ、思考を整理しながらアプローチを論理的に記述しようと試行錯誤し、制限時間いっぱい必死に書き続けました。たった数時間ですが、脳内の疲労感と、手書きによる指先の痛みには大学受験の記憶をよみがえらせるものがありました。

モジュール試験は、これまた門外漢の課題に対し、いつも業務を共にする仲間ではなく、人柄も考え方もわからず、バックグラウンドも全く違う方々との討議を経て結論・提案をまとめていく、それも二日間ぶっ続け。「大変そうだなあ」と漠然と感じて臨み、総括すれば、自分の思考の浅さを痛感した試験でした。

この試験をひとつのプロジェクトに例えてみれば、憲章で謳ったターゲット＝PMR 試験合格は達成したものの、過程はグタグタ。計画段階における、スコープ定義（プログラムマネジャーの役割認識）の曖昧さ、リスク分析の不足があげられます。プログラムマネジャーは決められたミッションを確実に行うだけでなく、チーム員の素性を把握し纏め上げ、未知の世界に切り込みステークホルダー全体の Win-Win を目指すもの。考え方もバックグラウンドも違う他の受験者からの予期せぬ発言に自分が思考停止状態になりかけたのは、試験に臨むまでのリスク分析の甘さや、他受験者との相互理解醸成ができなかったからではないでしょうか。また、課題の真意を外れ、自己中心的提案に偏りかけた討議進行もあり、課題の本質と「未知の世界への挑戦」をないがしろにした、「ゼロベース思考」ではない「現状に固執した思考」上の討議だったのではないのでしょうか。

幸い、そんな討議に行き詰りかけた際、審査員の温かな助言に助けられ、小さいながらも提案をまとめることができました。一連の試験を通じ、直面する課題に対する視座を高く意識し、全体を見渡した上でよりよい提案を導き出す姿勢を学べたと思います。

2. PMR としての展望

現在、タイの現地法人で PMO の一員としてプロジェクトマネジメントシステムの構築とその活用に取り組んでいます。会社全体が、高い視座の下、大きな発展を遂げられるよう、P2M の謳うプログラム観点をタイのマネジメント層に広めていきたいと思っています。

以上

【プロフィール】

東南アジアの拠点にて、Oil&Gas 関連のプロジェクトにおけるプラント加工管理、プロジェクトマネジメントを経験。

現在タイ現地法人組織内 PMO に所属、プロジェクトマネジメントシステムの構築と適用に従事。

2016 年 PMP 取得、2017 年 PMS 取得。